

白峯北岳の圖らざりし落雷

——青天の霹靂か神戸高商部員の厄難——

夏はなつかし南信濃路の伊那谷

昭和十四年、七月十一日の午後五時十七分、神戸市三宮驛の構内をするすると、こり出した上り列車には、眉秀でたる十三名の學生登山者たちが乗り合はしてゐた。神戸高等商業學校パーティで、當時この學校には正式な山岳部員がみんなで十七人を數へるのみだつたから、殘留部員と云へば僅か四名しかなく、グループのほぼ八割が出動したわけである。驛頭には部長の本田實教授をはじめ、留守隊の三好淳三氏ほか三名が、残らず顔を揃へて一行を見送つたし、ほかに、ちよつと傍人の視線をそばだたしめたのは、二人の女學生さんらしい娘御と共に、一人の上品な母者人らしい婦人が、しきりに一行のリーダー格らしい青年に向つて、「何分よろしくお願ひ申します」と繰返してゐる姿だつた。

またしても、十三名といふ少々面白くない数字が出てきたが、今はともかく、そんな数字に安閑と拘泥^{かがづ}らつて居られる場合ではない。手取り早く事實を書いて終ふと、見送りの三婦人は果して一つ家のお母さんと娘さんであつて、部員としては最下級生、つひ今年の四月、同じ神戸の第一神港商業を首席で卒業して、高商の一年生になつたばかりの朝田武彦氏（一九歳）の母堂と令妹とであつた。一行は大體二班に分れて、ここに神戸高商パーティとは縁故も深い、南アルプス北岳の集中登高を企てたのであるが、この十三名のうち實に實に、何とも云はふやうのない哀しい貧乏籠を引き當てた若者が二人出た。しかもその一人がこの朝田氏なのである。

神戸高商の山岳部は、その當時非常にハリきつてゐた。同じ系統で一つ兄貴の神戸商大が、有名な田中薰教授を部長に戴いて、晴れの臺灣遠征を決行（昭和十一年冬）したといふ、強烈な刺戟をごく手近に受けもしたし、その前年の一月には、部の先輩の藤林、友田氏たちパーティが、見事に嚴冬の白峯北岳をやつてのけたり、十一年度には聖岳、十二年度は同じく北岳と、翌十三年度だけは阪神地方空前の大水害の爲に中止もしたが、毎年、夏になると部の精銳、新進パーティをすぐつて、ともどもに登山靴の先っぽを、南アルプスの最高主稜に向けてきた。黒河内、戸臺。大河原、鹿鹽などといふ南伊那谷の静寂な村々が、つねに彼等の楽しい夏山の發足點でもあ

さて、今回の十三名であるが、同じく集中登高と云つても、從來までは精々五名か七名ぐらゐで、こんなに多くの参加部員を見た年はない。そこで前記の如くパーティを二つに分け、戸臺から八丁坂を長衛小屋に出で、仙丈、兩俣、左俣とやつて小太郎尾根から目的の大樺^{おほかんば}小屋に着くA班を九名、一方鹿鹽から三伏峠越え、鹽見、北俣、東俣、廣河内、農鳥と强行して、逆に間の岳北岳、小太郎尾根を経て同じ大樺小屋に合するB班を四名とした。この後者のメンバアが、リーダー梶金之助氏ほか中川利民氏（以上三年生）に、長谷川光郎、宮田良治氏（同二年生）と、みな相當の経験者のみであつたのは當然の陣容である。

そしてこの梶氏以下のB班は、七月十二日午前七時、伊那入船でA班の九名と別れ、翌十三日の夜は霧の爲に北俣を雪投澤と誤解して、寒い岩蔭にやむを得ずビザーケするやうな小事故にも出遭つたが、ともかく無事に東俣小屋、廣河内岳をやつて農鳥小屋に入り、問題の十六日午後二時四十分、主峰北岳を悠々と縦走して丁度午後四時ごろ、小太郎尾根を少しくだり、例の草すべりの急傾斜をお花畠のあたり迄達したとき、「突然、目の前が黄色くピカッと光つたかと思ふと、右背後にあたつてドカンと云ふ物凄い轟音を」（中川利民氏手記）聞いたのであつた。

心も軽く目ざすは大樺の山小屋へ

——豫定通り十二日朝八時頃に黒河内といふ部落までハイヤーで行き、それより九時間程石ころの河原道や、原始林をふみわけて午後八時頃長衛小屋につきました。何しろ五貫目も背負つてゐたので、とうとうアゴを出してしまつたです。それでもどうやら無事歩いて行けました。これから先どうかと思つたのですが、小舎で風呂に入り、飯を食ふと又元氣が出た。明日は仙丈へとハリキツてゐます。満天降る如き星を仰ぎ、谷川の響を耳に明日を期待してゐます。これでしばらくおたより出来ません。長衛小舎にて、孝一郎——。

九名のA班のうちの一員、高商二年生中村孝一郎氏(二〇歳)が、最後にその父上龍平氏に宛てて遺された、これがその際の消息の全文である。一行のメンバアは、今回の壯舉の總指揮官ともいふべき三年生松村守夫氏をリーダーに、同級の古參兵佐野隆一氏を副將として、以下は二年生組に中村孝一郎、橋本模一の二氏があるのみで、あとの朝田武彦、松田幸次郎、坂田秀治、伊藤孝作、畠穂の五氏とも、元よりこの年の春、中學のシャッポを脱いで高商に入學して、始めてアルプスに志した體の、元より全然の山の初年兵ではなかつたが、ともかく山岳部員としては最

下級の新兵組だつた。

だからパーティの指揮官は極めて慎重に、十二日前六時伊那入船着、ただちに其處で、米や野菜類を買ひ求め、七時ハイヤーを傭つて出發、自動車は戸臺まで入る筈であつたのに、連日の「雷雨」の爲に増水してゐて黒河内までしか行かず、中村君の消息の通り、午後に及んでの八丁坂の急登にはかなりの疲勞も覺えたが、午後七時まづまづ北澤小屋に安着。翌十三日も朝六時半には小屋を出發して、この日もまた例の仙丈岳頂上から大仙丈、蓼平に出る馬鹿尾根の長丁場には閉口もしたが、全員かたみに勵まし合つて午後八時、懷中電燈の光に助けられながら無事兩俣小屋に到着した。

そして次の十四日も、これも午前七時半には小屋を見捨てて、充分の餘裕をとつて左俣澤の遡行をはじめ、午後三時には第一目標の小太郎尾根着。小憩して草すべりの急坂を下り、同四時は目的の大樺小屋に着いた。山へはいつた最初の夜は午後七時、次は午後八時に及んでやうやく小屋へ着いたのに、この日は久しぶりでまだ陽の高いうちに、しかも今回の集中登高の根據地點へ安着したのだから、一行の氣持も云ひ難く樂しくはづんでゐた。

翌れば七月十五日である。一行は山麓からこの大樺小屋まで、大事をとつて三名のボーラーを

連れて來たのだが、今となつてはそれももう用はない。そこで竹澤一一君だけを残して、あとの二人を歸らせたのち、荷物の整理を一應終つてから、午前十一時十五分、伊藤、畠、松田、坂田の四新兵を小屋に残して休養させることにし、松村、佐野、中村、橋本、朝田の五氏して、まづ第一回の北岳偵察を決行した。知るべし、この五氏のうちでの高商新入生は、ひとりわが朝田武彦氏のみであつて、この人だけは全く小屋に殘留させて、休養を命ずべく餘りに元氣で、山も強くしかも大いにハリキッてゐたのである。

むくむくと南方尾根に浮く積亂雲

さうしてA班の先頭部隊五精銳は、この日の午後二時十五分、全パーティ十三名のうちの一一番に、標高三、一九二米のコンマの四、靈峰富士を除く本州最高の山北岳絶巔に到着した。第一荷物を持たない登高だから、その快適なこと殆ど神戸の裏山あたりを漫歩してゐる場合と異らない。一同はその頂上で午後四時まで、四日前の朝、伊那谷の宿驛で袂を分つたB班パーティの姿を待つた。が、前記の如く梶氏、中川氏たちの一行は、その日の午後七時を過ぎて、やうやく農鳥小屋に着いたから、所詮この絶巔うへでの「待ち人」は、いかに待たうと來らきた。

う筈がなかつたのである。

問題の七月十六日がかうして來た。この日はまた打ち續く晴天で、山小屋生活の快さは、今更に云ふべくもない。大樺小屋での九名は浮き立つ談笑裡に、いともんびりした朝食を喫したのち、今度は午前八時十五分、副將格の佐野隆一氏が、昨日一日休養した一年組の伊藤、畠、松田坂田の四氏を伴つて、第二回目の北岳登攀を行つた。頂上着は午前十時四十分。悠々たる高嶺の晝食を済ませてから、正午まで前日同様B班の來頂を待つたが、この時もまた依然として待ち人は來らず、下山に決して午後一時三十分小屋に着。松村、橋本、中村、朝田の四氏は、豫定通りすでにバツトレス偵察に出發して、小屋にはただ人夫竹澤一一君だけが居た。

ここでは是非、われわれが心に銘記して置きたいのは、その正午ごろ、佐野氏たちパーティが目撃した北岳頂上の天候である。これに就ては、幸ひに當の佐野隆一氏が書いてゐる。「我々が頂上にゐた頃の天候は、全く晴天で微風あり、仙丈岳、中央アルプス及び北アルプス方面は、雲一つなく眺望極めて良好なるも、甲州側は移動性のない霧でとざされ、バツトレスさへ見えなかつた。正午頃より、間の岳方面に積亂雲が相當發達して來た。」云々。

またもう一つ、われわれがもつと知りたいと考へるのが、前記の如くこの日の午前十一時ジャ

ストに農鳥小屋を出發し、佐野氏たちよりもほぼ三時間あまり遅れ、精銳四騎、極めて快適なピツチを北岳絶頂へ運んだであらう、B班棍、中川、長谷川、宮田氏、パーティが送迎した天候の状態である。これにも幸ひ一行の中川利民氏の、前の佐野氏のよりも更に克明な記録があつてこの際まことに有難い。すなはち中川氏たちは午前八時には全員起床した。が、農鳥の小屋は、御案内のやうにひどく水利の便が悪い。朝の炊事に手間どつて、それで出發が遅くなつた。しかし、今日ぞ、懐かしいA班の友に逢へる約束の日ではないか！

「一同益々はりきつて、殆ど休む間もなく北岳の尾根を急ぐ。不思議に足が軽くて、午後一時二十分には、早くも間の岳と北岳の間にある中白根のピークに着いた。何時の間に湧いたか、今まで少しも氣附かなかつた霧が次第に擴がつて、この時分にはすつかり右手甲州側の谷を埋め、更に尾根に吹き上げられて、まるで湯槽の湯氣のやうに、もうくと行手を立ち塞いでゐた。これより濃霧を潜り、岩場を攀ぢ、午後二時四十分遂に北岳頂上に着く。霧は依然山頂を包み、何かしら寒々とした夕方のやうな感じで、遙か南方農鳥岳の方に向にあたつては、かすかに遠雷の音までが聞えてゐた」

進むか退くかそれが運命のわかれ路

中川氏はなほ書いてゐる。「頂上を離れるに従つて、次第に霧もうすれ、薄日さへも射し始めた」と。そして丁度午後四時前後、小太郎尾根を外れて、所謂草すべりの急傾斜をお花畠のあたり迄下つた頃、全く突然眼の前が黄色くピカツと光つたかと思ふと、同時にドカンと云ふ物凄い轟音を耳にした。が、まさかそんな事が起らうとは、夢にも知らず同四時三十分、暖かい佐野氏以下五名の友の手に迎へられて、待望の大樺小屋へ到着した。着いてみると、なるほど松村氏たち四人の姿はない。しかし名だたる彼等の事だから、屹度近くの雪渓か何處かで、自慢のグリセードにでも没頭してゐるであらうと、元より氣にも止めずにすぐさま、四人は楽しい山男同志の團欒の中へ合流した。

しかるに嗚呼！その日の午後五時三十五分、何とも形容の出來ぬ悲痛な面持おももちをして、リーダー松村守夫氏が實に意外な、この場合、信じ得べからざる兎報を持つて、峯の頂上から戻つて來たのである。あり得べからざる事の一切が、今は殘らず明々白々たる眞實となつて、小屋にゐた九名のパーティの上にのしかかつて來たのであつた。あり得べからざる出來事とは何か？私は

いまペンを洗ひ淨めて、以下に事實の眞相を書き綴らねばならぬ。

昭和十四年七月十六日の午前中、松村、中村、橋本、朝田の四氏は小屋に居残つて、共同の持ち物その他の整理に當つた。天候は絶好の晴天、ただ北岳の山頂あたりには、薄いガスがかかつて見えたけれど、この山と、ガスとは非常な仲よしで、小屋から晴れきつた頂上の仰げる日などは一夏のうちに幾日もない。一通りの整理も終つたので、四人は午後零時三十分頃、かねてのプランに従つて、北岳バットレスの偵察に出發した。森林帶の中に、かすかに殘る銛目を頼りとして、間もなく長衛の岩小屋前に出、更に岳樺の密生した灌木帶を這ふやうにして横切り、大樺澤の大雪渓に出たのが丁度二時。振り仰ぐとバットレスはくつきりと上方にその偉容を見せ、頻りに一行の登攀を待ちのぞむかのやうである。

小憩の間も惜しさうに、四人は直ちに、雪渓を登り始めた。アイゼンを要する程でもなかつたが、次第に傾斜が急になりゆくので、雪渓の右側の小石のガラ場を登ることにする。暫く登り續けてみると、雪渓の下方から霧がすーつすーつと湧いてきて、いつの間にか一行の周圍を全く包んで終つた。十米先がやつと見える位の濃さである。しかしこの濃霧も、やがては晴れてくれるであらうと、次第に傾斜を増してくる雪渓を、一本のピツケルで足場を作りつつ進む。かうして

遂にバットレス直下まで達したが、霧は益々濃くなる一方なので、リーダー松村氏は思ひきりよく偵察断念を決意して、午後二時三十分、暫くそこで休憩した。

休んでゐるうちに、どうやら濃霧がだんだん薄らいでゆく様子である。が、松村氏はきつぱりと、このまま引返さうと中村氏に計つてみた。中村氏はしかし、此處は、すでに頂上にも間近いし、昨日も頂上に四時まで居て充分に小屋へも歸れたし、それに例の鹽見班（B班）が來るかも知れぬ、等、等の理由を擧げて、しきりに頂上をやつて歸路につくことを主張した。運命論的な見方をすれば、この邊からすでに一行に、黒い魔の手が刻々と押し冠さつてきたものと云つて云へないこともない。

釣尾根上で初めて聞く遠雷の音

よろしい。それもいいだらう。松村守夫氏は沈思した。そして決心した。この際進むか、退くか。退くも可、進むもまた可であるが、かりに中村氏の主張に従つて、頂上へ進む說に左袒する段になると、ここにじつくり落着いて考ふべき、大略四つの理由がある。その第一は、目下のところ下方には濃霧が去來してゐる。まして急な雪渓だ。一行四人はアイゼンを誰も持たず、雪渓

下降技術にも格別な自信がない上に、ピツケルは松村氏一人しか所持してゐない。若しも、途中でスリップなどしては事である。

その第二は、尾根の上方は霧も次第に薄らいでゐるし、よしまたこの上天候が悪化しても、頂上からのルートならば幾度もの経験があるし、取り立てての不安もないこと。その第三は進むも退くも、時間的には殆ど大差がないであらうこと。そして最後の一つが、今も中村氏が主張した通り、この際頑張つて尾根へ出て、梶、中川、長谷川、宮田氏たちB班の猛者連にめぐり合ふことが出来れば、それはどんなにか嬉しいであらうこと、以上の四點がそれである。かくてリーダーは心に頷いた。よろしい。それもいいだらう、と……。

直ちに前進が始まつた。大樺澤の本流が、長衛岩小屋から數へて右に、第一、第二の雪渓を分け、第三の所で大きく二分される。この向つて右のが左俣である。その左俣をまた二つの所から、どこまでも右に、岩場に取りついて少々ばかり苦闘すると、午後三時三十分、一行は極めてスマースに目標の釣尾根第一隆起の上に出た。この時の天候状態が、また後學の爲に私共の切に知つて置きたいところのものである。生存者松村、橋本兩氏の手記が、簡略ながらよくその喝望を醫して呉れてゐる。

「小憩して周囲の天候を案するに、信州側は白雲の間に、青空を見る程度の半晴状態、甲州側は曇天で、大樺澤は依然濃霧に閉ざされており、北岳頂上は明瞭に見え、富士山も遠望され、間の岳も明瞭に眺められた。然も間の岳の上空の信州側寄りには、一面の黒雲がかぶさつてゐた。そしてゴロゴロと鳴る遠雷をその方向から聞いた」云々。因みに書き添へて置く。前記の如く、大樺澤の霧は非常に深かつた。しかし一行は、それまで一回も、雷鳴などを耳にしたことはない。この日午後三時三十分、釣尾根の上に立つて小憩しつつ、初めて間の岳信州側寄りの黒雲の中から、薄氣味の悪いゴロゴロ様の音を聞いたのであつた。

かくてパーティが、小憩のちにその釣尾根から、松村、朝田、中村、橋本氏のオーダーで、たがひに約二米程度の間隔を保ちつつ、稜線づたひに北岳へ向つて前進を續け、丁度北岳の頂上より約二十米ばかり南側に達したとき、「これぞ正しく青天の霹靂とでも云ふべきか、「突如猛烈な闪光と共に、全員地上に叩きつけられ」て、第二、第三の位置でゆるやかに歩いてゐた朝田、中村の二氏が一瞬にして幽明境を異にし、めいめい僅か二米ぐらゐの間隔で歩してゐたのに、トツツとラストの松村、橋本の二氏が、奇蹟といふ言葉も愚な生還を見るに至つたのである。

落雷で掘られた二米ほどの大穴

それこそ全く文字通りな疾風迅雷、凡てがほんの一瞬間に起つた出来事であつただけに、肝腎の同行者に直接これを訊きただしてみたところで、どの程度まで事件の核心が把み得られるかどうかは疑はしい。ともかく、この哀しむべき惨事の生じたのは午後正四時。一番先頭を歩いてゐた松村氏は、「地上に叩きつけられた一瞬間、相當大なる岩石の飛散するのを見た」といふし、また殿軍を承はつてゐた橋本氏は、「腹部から下肢にかけ、かなりの強さの電流を感じたといふ。兩者に共通する感想としては、十二名とも一二三秒間身體がしびれ、尙強烈なる煙硝の匂ひを感じて、思はず激しい頭痛を覚えた」といふ。

位置として、一番うしろに在つた橋本氏は、事のちまづ中村氏が頭を南にし、打伏せになつてゐた(つまり、歩行の體勢とは逆に)ので走り寄つて抱き起して、「中村!」と呼んでみたが答へはなく、すでに顔面は半分紫色になつてゐて、頭髪は赤味を帶び、口からは出血して居り、脈搏も心臓の鼓動も止まつてゐた。更に朝田氏となると一層慘憺たるもので、遭難地點の稜線より西側下方、約十米ほども撥ね飛ばされ、頭部を谷側に、殆ど素つぱだかの状態で打伏し、抱き

起した瞬間、ただグウグウと二三回咽喉が鳴つたのみ、一眼見てこれは中村氏以上に絶望の状態と受けとれた。

念の爲に、遭難當時の兩氏の服装を調べてみると、兩氏とも大體同じやうな風で、アンダア・シャツにチョッキ、ニッカア、ストッキング、ソックス、登山靴に登山帽といふのだが、中村氏の方はまづ右のコメカミに長さ約一寸、深さ骨膜に達すると思はれる裂傷一つ、頸にも長さ三寸の裂傷、胸部内出血の模様などあつて痛ましかつたが、それでも衣服、登山靴等は全部身に着けてゐた。けれども、更に悲惨を極めてゐたのが、一行のうち一番短軀、華奢型の青年朝田氏の遺骸であつた。かういふ風に、遺骸検視書の一半をそのまま紹介するなどは、著者たる私の最も不本意とする所であるが、このアクシデントばかりは原因が事移^{けう}有にぞくする落雷であるだけに、眼をつぶり、心を鬼にして、一通りはここに書き添へて置かねばならぬ。

すなはちこの遭難者は、口の邊りが全く焼けきつて變色して居り、頭の眞中に長さ一寸、幅四分ほどの穴があつて、胸部にも腹部にも、内出血状態を示す赤紫色の變色が見え、全身無數の裂傷、打撲傷の上に、左の足裏にまで十文字の焼け痕を残してゐた。しかも衣類たるや、ワイシャツの上部のみが、僅かに身についてあるほかは全部剥ぎ取られ、右足の靴だけは履いた儘だつた

が、左の靴はぼろぼろになつて足からモギ取られてゐた。結局のところ短軀ではあつたが、四人のうち一番高い位置を歩いてゐた爲に、落雷が最も直接に最も激烈に、この遭難者を襲つたものとしか考へ得られない。

のみならずこの人は、前上歯に四枚、奥歯にも二三枚の金歯をはめてゐた。だから一層激しい雷に見舞はれ、撥ね飛ばされた最初の地點には、あの堅固な白峯北岳頂上附近の岩石層中に、南北一米半、東西二米、深さ約半メートルで地雷火か爆弾にでもやられたやうな、物凄い大穴があげられてあつて、十七日午前九時過ぎ、梶、長谷川、坂田氏たちが遭難後第一に現状へ馳せつけた時には、前記の如く掘られた穴の中にこの人の姿無く、そこにはただぼろぼろになつたチョッキの切れ端と、「朝田」と彫つたアルミニウムのコップの破片が落ちてゐただけだつた。遭難後速く現地へ出張して、大いに奔走した部の先輩友田謙三氏が言ふ如く、或ひは中村氏も感電はしたもの、他の直接の致命傷は、まづ落雷の爲に朝田氏の足許の穴が掘れ、その岩石の破片に依つて全身を強打、裂傷したことから生じたものであつたかも知れない。

最高位置を歩いてゐた者の悲運か

一瞬にして二人の若人の生命は斷たれて終つた。同行松村、橋本の二氏は、遭難者の即死を見て、今は兩者への手の施しようもないと覺るや、ともかく大檜小屋の僚友に急を報すべく、なほも二名の後を追ひかけるやうに、ゴロゴロと鳴り續ける雷鳴の尾根道を、一散に小太郎尾根めざして駆けをりた。雷に金物は禁物かなものと知つて、北岳の頂上から二つ目のピーカの上に、松村氏は愛用のピツケルを放棄した。そして前記の如くその日の午後五時三十分には、小屋に着いて哀しい兎報をもたらした。事は重大である。速座に遺骸の收容、各家庭への打電、檢屍の臨場等の手續を踏まねばならぬ。だが一行十一名は、連日のアルヴァイトで心身綿の如く疲れてゐた。

そこで翌十七日午前四時半、松村、佐野の兩氏は人夫竹澤君をつれて長衛小屋に向ひ、梶、長谷川氏たち全部員は、折柄小屋に同宿した尾崎成蹊高校教授から、その人夫牛田重義君を借り受けたりして、哀しみの遺骸をまづスリーピング・バッグに收め、左俣澤からの登山道と小太郎尾根との合する地點の、やや手廣い場所までおろして檢屍を待つ事にした。急報に驚いた人々が、深き憂愁を包んで神戸から伊那谷へ飛んでくる。十八日また雷雨、小屋の附近にも落雷あり。同日遭難者の父兄高遠着。ぜひわが子の遺骸を見たいと云ふ老父に對し、涙を呑んでその事の行はれ難きを説く、先輩、現役部員たちの立場もまたつらかつた。

かにかくに、山ふかき奥地のゑに事も遅れ、二十日午前十一時半、夙に馳せ参じた本田山岳部長以下、全員立合の下に山梨縣小笠原署巡查部長、藤森重明氏によつて検屍も済み、遺骸は再びシユラーフに入れられ、學友たちに依つて香水も撒かれ、くさぐさの花も飾られ、かねて用意の線香も點ぜられて、午後一時半には、茶毘の豫定地たる左俣源流地點にをろされた。中村氏の遺骸は晒木綿で蔽はれたが、朝田氏のには特に神戸の母君より託された、眞新しい浴衣が掛けられる。丁度その時から九日前の朝、神戸三宮驛のプラットフォームで、共に元氣に見送りつ見送られつした母と子、その愛兒が、今はかくも變りはてた姿となつて終つたのか……。

北アルプス燕岳の合戰澤で一人、ここから遠くはない同じ伊那谷の安平路で一人、九州筑豊炭田中の一丘稜で二人、合せて四人だけ、私の苦心蒐集にかかる「山の過去帳」中にも、落雷に依つての遭難登山者があつた。が、そのうちの三名は、せいぜい五、六百米の丘稜を歩いてゐて、^{あなか}地方によく見る「歩行者の雷死」同様の遭難に過ぎなかつたし、北アルプスでの一件は、雷に打たれて昏倒したのち、しばらくしてそれが持病と云つてもいい心臓衰弱の結果死を急いだ、當年五十三歳の一老紳士の悲劇であつた。

然るに、これは三千百九十米餘の、わが國の登山界としては初めてみる「高山峻岳での雷死」

である。傳へ聞く歐洲アルプスには、毎夏定まつて七・八件の落雷、感電の遭難があるといふ。だが本朝では、近代的登山の發足を見て茲にざつと四十年、まだアルプスに於ける眞の落雷遭難を知らなかつた。かく云ふ私も、事件の恰度一週日ののち、八名の若い山友達をつれて鳳凰三山から白鳳峠、廣河原小屋を経て北岳に登りもした。そして南北二米、東西一米半、深さ半米強の大穴を目撃して驚愕浩嘆した。しかも私共もまたこの山の頂上附近で、沛然たる大雨に逢ひ、雨忽ち晴れてののち、遙か南方農鳥岳方面に底氣味の悪い遠雷の音を聞きもした。

ともかく不思議な遭難である。僅か二米位の間隔を置いて歩いてゐて、眞中の兩者が瞬間にしテ即死の厄に遭ひ、しかも自慢のピッケルを、一行のうち唯一人所持してゐた先頭に、何の支障も無かつたといふのは、一應合點のゆかぬ事實である。神戸高商山岳部有志は、程もなくこの遭難事實を逐一、わが國氣象學界の泰斗藤原咲平博士に報告した。博士は報告を得て、懇切にもただちに下記の如き返書を送られた。のち更に博士はこの遭難を中心にして、中央氣象臺測候研究會の會誌『天氣と氣候・第六卷第十一號』に、「山の落雷の記事」と題する興味深き研究の一端を發表されてゐる。

——（前略）遭難現場は、北岳最高部の由、然りとすれば隆起物に對する落雷の一例と存じ申

候。元來電氣現象は、非常に急速なる経過を取る爲に、百萬分の一 秒程度の時差が電流に於ては主流と支流の差となり、支流は數十又は數百分の一程度の弱流になるものかと存ぜられ候。御所持品も大した差なく、只松村氏がピツケルを持ちあるが特別なるも、位置が稍低くなりし爲に、ピツケルの爲の危險性も現はれざりし御様子にて、中村氏の倒れし方向及び位置より見るも、主電流が全く最高位置にありし朝田氏を襲ひたる事に相違なかるべしと存じ候。（後略）――